申請者：阿部　智和

論文題目：　オフィス空間の物理的特徴と組織内コミュニケーション・パターン：
人員間の距離と空間認知に着目して

審査員　沼上　幹
守島基博
山下裕子

本論文は，国内の大手化学メーカーと電機メーカーの従業員に対する質問票調査を実施し，人員間の距離やオフィス空間に関する認知がその人たちのコミュニケーションにどのような影響を及ぼすのかを実証的に明らかにしようとするものである．本研究が生み出した主要な知見は3つある．まず第1に，人員間の距離が離れると，その人たちの対面的コミュニケーション頻度がかなり低下すること，また距離が離れるにつれて電話によるコミュニケーションは増える傾向にあるが，e-mailは距離とは関係なしに用いられていることなどを本研究は明らかにしている．第2に，ある種のたまり場（廊下）が対面的コミュニケーションの頻度を高める効果をもつものの，より近い場所にいる人員同士のコミュニケーションを更に増やす傾向がある，ということを本研究は明らかにした．すなわち，たまり場は距離の遠さを克服する手段ではなく，距離の近さがコミュニケーションに与える効果を増幅するものとして機能しているのである．第3に，オフィスにまだ慣れていない人（配属後2年未満の人）はパーティションの数などの物理的な特徴によってコミュニケーションがとにくくなると認識するのに対して，慣れている人（2年以上経過した人）は周囲の視線や会話などの対人関係的な特徴によってコミュニケーションがとりくくなると答えていることが明らかにされた．同じ大部屋に所属していても，その空間への慣れによって，異なる要因がコミュニケーションの取りやすさを左右するのである．

本論文の評価するべきポイントは2点ある．まず第1に，組織内コミュニケーションを規定する組織のフォーマルな構造とオフィスの物理的な特徴という2つの要因のうち，通常は調査の難しい後者に焦点を当てて，着実な発見事実を積み上げている点である．また第2に，単に物理的な環境の物理的特徴に議論をとどめることなく，配置後の年数によって物理空間・社会空間の認識が変わるため，キャリアに応じてコミュニケーションのとりやすさに影響を及ぼす要因が異なることを具体的に示した点である．

本論文の問題点は，調査対象企業からの合意が得られなかったために，オフィスの物理的設計図そのものや特定の人名が入ったコミュニケーションの実績をデータとして収集することができていない点である．また注目するべき従属変数の選び方に若干の改善余地が見られる点や，章を越えた統一性の追求がもう少しなされている方が望ましいなどの点を指摘できる．しかし，このような問題は存在するものの，本研究が分析したデータはそれ自体でも価値があり，そこから十分に意義深い知見を引き出していることは大いに評価できると思われる．

よって，審査員一同は，所定の試験結果をあわせて考慮して，本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定に準じた取り扱いにより一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する．